

副詞「よもや」の変遷

—意味及び共起する文末形式の観点を中心に—

Changes in the Adverb “Yomoya”:

A Perspective on Meaning and Co-occurring Sentence-final Forms

黄 冬 思

HUANG Dongsì

The purpose of this paper is to clarify the historical evolution of the modality adverb “yomoya”. In this paper, I have collected and examined examples of the usages of “yomoya” from the Muromachi period to the present day from the perspective of changes in the form of sentence endings that co-occur with “yomoya”, changes in meaning, and changes in the genre in which it is used. It was found that the transition of the sentence-final form co-occurring with “yomoya” is related to the transition of its meaning, and that the meaning of “yomoya” indicates “unexpected” while “yomoya – I didn't think that” is fixed as time goes by. In the Edo period, “yomoya” was used in many conversational texts in Ukiyo zoshi and joruri, and was recognized as a “spoken” word. From the Meiji-Taisho period, the emergence of the restrictive modification usage and its extensive use in descriptive sentences have also led to a shift away from the “spoken” form of “yomoya”. Even in the Diet, where it is used as a “spoken word”, “yomoya” is used only in a limited way as an expression to reproach others in a polite tone, and its use is thought to have been narrowed from the usage in the Edo period.

キーワード： モダリティ副詞、文末形式、意味、話しことば、書きことば

1. はじめに

モダリティ副詞¹「よもや」は『現代副詞用法辞典』(2002:700)では「やや古風なニュアンスのある表現」と記載されている。現代日本語における実際の使用でも、下記の用例が認

¹ 仁田(2000)は、「モダリティ」を「命題」の対する概念として捉えており、「言表事態をめぐっての話し手の捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達態度のあり方を表した部分」にまとめている。工藤(2000)は、副詞によって「モダリティ」を表すことをモダリティ副詞と呼んでいる。本稿はそれに従う。

められる。

- (1) 辰五郎は植木職人の親方なのだから、よもやさような無茶はいたすまい。と考えて淳斎は口から迸り出そうな怒声を、どうにか呑み込んだ。(小松重男、『川柳侍』)
- (2) 逆に早くも追い込まれたのがラツィオだ。よもやの連敗で現在最下位。戦力補強を施して臨む再開後に復活はあるのだろうか。
(『週刊サッカーダイジェスト』2001年1月24号)

用例(1)における「よもや」は時代小説の『川柳侍』に出現しており、辰五郎が無茶する可能性を否定する淳斎の判断を導いている。用例(2)における「よもや」は、連体修飾用法であり、試合結果の報告において、試合の結果が想定外であったことを示す文脈で使用されている。上の用例のように、現代日本語において、「よもや」が「言表事態」(仁田 2000:81)先行し、「事態成立の可能性の否定」と「事態の想定外」の意味を予告的に示すものとして使用されており、時代小説と新聞記事、会議録、翻訳小説などのジャンルに多く用いられている。このように、現代における「よもや」の使用は限られており、特定のジャンルに出現することが分かる。

また、「よもや」の類義の言葉には「まさか」があり、上記の用例では、「よもや」を「まさか」に置き換えて「まさかさような無茶はいたすまい」と「まさかの連敗で現在最下位」という言い方が成立する。しかしその一方、「よもや」と「まさか」の両方が使えるとは限らない用例もある。

- (3) 取ることはおみて、よそにて盗みし金箱・衣類・道具まで、持つて出にくくなりしや、夫婦がかへりし聲をきくと、その身ばかり、足をはかりに逃げてゆく。(萬々の妻)「よもやモウ盗んでかへりましたろう。御かへりなさりませ。」(莫レ切自レ根金生木)
- (4) 「死んじゃったの？」と、美知が目を見開いて、「まさか!」「その、まさか、ですよ」―しばし、誰も口をきかなかった。(赤川次郎、『ベビーベッドはずる休み』)

用例(3)では、盗人が萬々夫婦の声を聞いて逃走する場面を描いている。この用例では、「よもや」は肯定推量形式「う」と共起しているのに対し、「まさか」は肯定推量形式と共起できず、用例(3)では使えない。その一方、「よもや」は感動詞の用法を持たないため、用例(4)では、「よもや!」が使えない。

「よもや」と「まさか」は、置き換えられる場合があるのに対し、置き換えられない場合

もある²。また、置き換えられる場合では、両者の使用は完全に一致しているとは言えず、「まさか」が「よもや」より広い文脈で使用されたり、会話でより高い頻度で使用されたりしているイメージが認められる。モダリティ副詞の働きを明らかにするには、意味・用法が近い語との関係の解明が重要になるが、本稿では、それに先立って「よもや」の使用実態を明らかにする。類義の「まさか」との関係については、本稿では使用数の史的概観を行うにとどめ、詳細な検討は別稿で述べることにする。

先に見た用例(1)と用例(2)、用例(3)からは、「よもや」の使用実態が一部窺えるものの、「よもや」が全体的にどのように用いられていたのかが明らかではない。また、現代では、特定のジャンルに用いられる「よもや」が、どのような歴史的変遷を辿って現在の使用実態に至ったのかが明白ではない。そこで、本稿では、モダリティ副詞「よもや」を取り上げ、共起する文末形式と意味の観点から、「よもや」の歴史的変遷を明らかにする。また、「よもや」が各時代に用いられている作品のジャンルを考慮し、その使用が狭まったり、「やや古風なニュアンスのある表現」(『現代副詞用法辞典』2002:700)を持つに至った理由を明らかにする。

2. 先行研究

モダリティ副詞について、多くの先行研究が認められる中、「よもや」を中心に上げる先行研究は少ない。本節では、「よもや」への言及がある先行研究について概観する。

山田(1922)は、「よもや」は述語に推測の語を要するものであるとし、その後、畠(1991)と西原(1991)、工藤(2000)は「よもや」について、「否定」及び「推測」のような述語への制約を指摘した。特に、工藤(2000)では、「事態実現の確実さ」と「話し手の確信の度合い」の面から推量を表すモダリティ副詞を4種類、「確信」「推測」「推定」「不確定」に分ける中で、「よもや」は呼応現象を持つ副詞であり、「推測」のカテゴリーに位置付けている。その一方、山口(2001)では、「まい」の打消推量寄りに捉えうる例が挙げられており、「よも」「よもや」と共起することが特徴であると論じられている。このように、モダリティ副詞の特徴は一定の述語形式との呼応から明らかにされてきており、「よもや」についても共起する文末形式の検討が重要であろう。本稿はそれらを踏まえて、述語の形式を一つの観点として「よもや」の共起する文末形式を考察する。しかし、実際の用例では、モダリティ副詞がある文は必ず述語があるとは限らない。そのため、本稿では、述語が見られない用例も視野に入れつつ、「よもや」と共起する文末形式の変遷を見ていく。

続いて、「よもや」と「まさか」の両方を取り上げる小池(2002)を説明する。小池(2002)

² 「よもや」と「まさか」は置き換えられる場合があることに加え、『類語大辞典』(2002)では、「よもや」の解釈に単なる「まさか①」のやや改まった、古めかしい言い方。」という記述がある。こうした点からも、「まさか」「よもや」は類義語の関係にあたると思われる。

はモダリティ副詞の共起パターンを提示しており、異なるモダリティ(形式)と共起する「共起型」と一つのモダリティ(形式)と共起する「呼応型」に大別している。さらに、小池(2002:26)は、「共起型」に「時期の変遷に伴い、他のモダリティとも共起するようになっていく」「累加型」及び「時期の変遷にかかわらず、複数のモダリティが一定の割合で共起する」「共立型」、「時代の変遷に伴い、共起するモダリティが減少していく」「漸減型」という3つの下位分類があると主張している。小池(2002)は、明治期からの小説を中心に調査を行い、述語が見られない「言いさし³」と「一語文」が増加するということで、「まさか」が「漸減型」に属しており、「時代の変遷に伴い、共起するモダリティ(形式)が減少していく」ことを明らかにしている。しかし、「まさか」の類義語である「よもや」については、用例が少ないこともあり、「よもや」が明確に位置づけられることはなかった。つまり、小池(2002)では、「まさか」に置き換え「よもや」が使えることで、「よもや」は「事態の想定外」と「事態成立の可能性の否定」の意味があると述べている。しかし、その調査では、「よもや」の検討は明治期の13例に限られており、「事態の想定外」の意味のある実例が挙げられていない。また、「よもや」の共起する文末形式が分析されておらず、「よもや」の共起パターンが不明である。

ここまで、本稿は、「よもや」に触れている先行研究を概観してきた。「よもや」に関して、共時的な先行研究は山田(1922)と畠(1991)、西原(1991)、工藤(2000)があるのに対し、通時的な研究について小池(2002)しかない。また、小池(2002)においても、「よもや」の歴史の変遷が十分に明らかされたとは言いがたい。本稿は、それらの研究現状を踏まえて、共起する文末形式、意味の観点から「よもや」の歴史の変遷を明らかにすることを目的とする。また、各時代では、「よもや」が用いられている資料のジャンルを分析し、「よもや」が現在の用法になる経緯を明らかにする。

3. 「よもや」の使用概観

本節では、「よもや」の前身である「よも」、および類義語の「まさか」を併せて調査⁴を

³ 小池(2002)は「マサカ」の共起形式別の出現傾向を考察している際、述語まで言い切らない用例群を「言いさし」と呼んでいる。また、マサカは一語のみで用いられるが、その後の“……”によって何かを言おうとしたいのだが言えないという感じを表しているので、「言いさし」として扱われている。本稿はそれに従う。

⁴ 江戸時代以前の用例は、「日本語歴史コーパス」と『新編古典文学全集』、『日本古典文学大系』から収集している。明治大正時代の用例は、「日本語歴史コーパス」と「CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪」、「CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪」から収集している。昭和以降の用例は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から収集している。また、手作業で重なる用例を取り除いた。国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(バージョン 2021.03、中納言 2.5.2)と国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(バージョン 2021.03、中納言 2.4.5)を利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「ヨモ」「マサカ」をキー検索語にしてデータを収集した(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/index.ht>

することで、平安時代から現代に至るまでの三語の使用について数量的概観⁵を行い、「よもや」の変遷について各時代の傾向を把握する。調査結果に基づき、「よも」「よもや」「まさか」という三語の用例数を表1にまとめた。

表1. 「よも」「よもや」「まさか」の用例数について

	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	明治大正	現代	計
よも	0	61	71	19	25	43	6	225
よもや	0	0	0	1	159	84	102	346
まさか	6	0	0	0	71	502	3276	3849
計	6	61	71	20	255	629	3384	4420

まず、「よも」が確認できる最古例は平安時代に成立したと思われる『竹取物語』の会話文になる。

- (5) 「あひ戦はむとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ。翁のいふやう、(竹取物語)

また、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』のような説話から「よも」の使用が多数確認された。しかし、江戸時代から「よも」は「よもや」に侵食⁶されており、だんだん使われなくなり、現代では、「よも」の用例は6例しか観察されず、時代小説(4例)と児童文芸(2例)を解説する文脈の中に用いられている。なお、その6例は全て「まい」と共起している。こうした限られたジャンルに用いられていること及び共起する文末形式が単一であることで、現代では、「よも」が影薄い存在になったと言ってもよい。

ml 最終閲覧: 2021年6月29日)。

⁵ 本研究は、各時代における調査対象のサイズの大きさを考慮し、国立国語研究所により開発された「まとめて検索『KOTONOHA』」を用いて、語彙素「よも」「よもや」「まさか」を検索している。検索した結果は時代別を示すものに調整した。そこで、三者の使用傾向は今回の調査結果から見られる傾向がほぼ一致していることが分かった。そのため、本稿は数量的な概観を行うことにした。とはいえ、本稿における数量的な概観は直ちに増減を示すものではなく、参考程度に提示したものに過ぎない。

⁶ 平安時代と鎌倉時代では、「よも」は「省略」と「言いさし」の用法を持っていたのに対し、室町時代から、「省略」と「言いさし」の用法が見られなくなった。また、室町時代以降、「よも」と共起する文末形式はほぼ「じ」「まじ」「まい」に限られている。現代における「よも」の用例は6例しか観察されていない。そのため、「よもや」は「よも」の用法を侵食し、「よも」の代わりに用いられていると考えられる。

「よもや」は室町時代に初めて観察されるが、1例のみであった。江戸時代に入ると、「よもや」は「よも」の用法を継ぎ、盛んに用いられており、159例になった。ちなみに、江戸時代を前期(1750年頃)と後期(1750年頃以降)を区切った場合、前期の用例は91例であり、後期の用例は68例となる。その際、共起する文末形式及び地の文・会話文に出現する比率前期と後期が大きく変わらない⁷ということで、本稿では、前期と後期を区別せず江戸時代の用法を一括に扱うことにする。また、明治大正時代から、「よもや」の用例数が減っており、現代はやや回復してきたが、102例にとどまっている。

一方、李(2019)に指摘があるように、「まさか」は名詞として奈良時代から使われていること、江戸時代に副詞の用法が成立したことが確認された。

用例(6)は江戸時代に「まさか」が名詞として使われる用例になる。用例(7)は「まさか」が副詞として使われる用例になる。

- (6) いつその与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売ろう・まさかの時は切り取りするも侍の
ならひ・ (仮名手本忠臣蔵)
- (7) 一体茶屋への義理で出た事なれば、まさか捨ててもをかれまい、と来て障子をさらりと
明る。 (繁千話)

明治大正時代に入ると、「まさか」の用例は、一挙に502例と増加する。さらに、その勢いが保ったままで現代の3276例に至る。なお今回の調査範囲では、平安時代と鎌倉時代、室町時代における「まさか」の用例は観察されなかった。

以上、時代を経るごとに、「よも」「よもや」「まさか」の三語の使用について数量的概観を行った。「よも」「よもや」「まさか」の三者が異なる時代に好まれて使われていることと、「よもや」が江戸時代での使用が圧倒的に多いことが窺われる。また、「よもや」の使用は明治大正時代から衰退に向かっていく傾向が見られる。このような使用傾向をもとに、次節では、「よもや」の使用実態に対する考察を行う。

4. 「よもや」の変遷について

前節では、「よも」「よもや」「まさか」という三者の関係性を、数量という側面から分析し、数量的な観点から、「よもや」が江戸時代に多用されること及び江戸時代以降、「よも

⁷ 本稿は、江戸時代を前期と後期に分かれて、文脈(会話文・地の文)及び共起する文末形式の観点から用例を分析した。その結果、前期とされている91例の中、会話文は54例であり、前期用例の59.3%を占めており、後期とされている68例の中、会話文は44例であり、後期用例の64.7%を占めていることが分かる。また、前期と後期における「よもや」と共起する文末形式についても分析を行った。各項目における比率が大きく変わらない。以上のことを用いて、「よもや」の用法について前期と後期を一括して扱っても差し支えないと判断した。

や」の使用が少なくなったことを提示した。しかし、その変化はあくまで量的変化にとどまっており、各時代において、「よもや」が具体的にどのように使用されるのかが不明である。そこで本節では、共起する文末形式と意味、ジャンルの観点から、各時代における「よもや」の使用の実態を明らかにする。このことを通じて、室町時代から現代に至るまで、「よもや」の歴史的変遷を明らかにする。

4.1 「よもや」と共起する文末形式の変遷

本節では、「よもや」と共起する文末形式の変遷を明らかにする。今回の調査では、述語完備文⁸の用例及び述語完備文ではない用例が観察されている。前者は、「助動詞と共起する用例」及び「終助詞と共起する用例」、「よもや」が平叙文に用いられる用例」に分類できる。

まず、「助動詞と共起する用例」は述語完備文に属しており、さらに①打消推量を表す助動詞と共起、②打消を表す助動詞と共起、③肯定推量を表す助動詞と共起に下位分類される。

「①打消推量を表す助動詞」と共起する例。

- (8) 「よくよく分別きはめ。よもやさきにもこのままはおかじ。掴みにくる時、腰半分切つてやって、かしら此方におくが」と申す。
(好色一代男、巻七)
- (9) 「この度立ち越え頼みなば、よもや外には見捨て給ふまじ」と、文細々と書きしたため、
(武道伝来記、巻八)
- (10) 若い女の腋臭を『甘い女の匂』として喜ぶ米國の男でも、よもや此不快極まる頭髪の臭を嗅いで快感を覺えたり、喜んだりしないだらうと思ひます⁹。
(『婦人倶楽部』1925年6号、橋本龍三、頭髪の臭味を無くする法)

「②打消を表す助動詞」と共起している用例。

- (11) 「民部程の侍が、よもや言葉もかけずに、乗り打ちすべき故なし。」(武道伝来記、巻五)

⁸ 述語が見られない文をめぐってさまざまな議論がなされた。森山(2000)は、「述語構造が分化し、文の解釈を指定できる文」を「述語完備文」と呼んでいる。森山(2000)によると、それらの場合では、述語が省略されても、イントネーションなどによって話し手の意図が伝わるとのことである。

⁹ ここでは、文末思考動詞「思う」がある。森山(1992)は「思う」は文末でスル形で用いられた場合では、モダリティに類似しており、「不確実表示の用法」と「個人的な意見」を表すことができると述べている。しかし、モダリティ成分がある文では、「と思う」は「個人的な意見」の意味を表す。用例(10)において、「と思う」はモダリティ成分「だろう」の後に来ているので、「個人的な意見」を表している。

- (12) 「煙草あけてゆくやら、吸啜が見えぬ事、よもや禿はとらぬはず」と、おもしろからぬ咄する内に、 (好色一代男、巻五)
- (13) プレーには自信があったが、三十一歳のディフェンダーがよもや日本代表になるとは思えなかった。 (一志治夫、『狂気の左サイドバック』)

「③肯定推量を表す助動詞」と共起している用例は用例(14)である。

- (14) 取ることはおみて、よそにて盗みし金箱・衣類・道具まで、持って出にくくなりしや、夫婦がかへりし聲をきくと、その身ばかり、足をはかりに逃げてゆく。(萬々の妻)「よもやモウ盗んでかへりましたろう。御かへりなさりませ。」 (用例(3)の再掲)

述語完備文の中で、終助詞と共起している「よもや」は、以下のような用例になる。こられの場合では、「よもや」は終助詞と共起し、反語表現として使われている。

- (15) 吉三郎は、この女にこちなやみて前後を弁へず、憂世の限りと見えて便りすくなく現のごとくなれば、人々の心得にて、「この事をしらせなば、よもや命もあるべきか。」(省略)最期の程を待ち居しに、おもへば人の命や」と (好色五人女、巻三)
- (16) 是をうき世の慰みと覚て、「よもや悪敷ものを、人のあのごとく見るはづはなき事ぞ」と、日／＼に町ありきしてげり。 (西鶴織留、巻五)

述語完備文の中で、共起が見られておらず、「よもや」が直接に平叙文に出ている用例。

- (17) あとでそれと聞いた彼女も、よもやと本當には信じかねたくらみだつた。
(『婦人倶楽部』1925年6号、木下宗一、淪落廿年の闇から浮び出でた子爵令嬢が新生の女給生活)
- (18) 此調子なら先何事もなかりうと、一時は私の甥も途中から引き返そうと致しましたが、よもやに引かされて、暫くは猶も跡を慕って参りますと、丁度油小路へ出ようと云う、道祖の神の祠の前で、折からあの辻をこちらへ曲がって出た見慣れない一人の沙門が出合いがしらに平太夫と危くつき当りそうになりました。 (芥川龍之介、「邪宗門」)

続いて、述語完備文ではない用例を見ていく。述語完備文ではない用例は、「言いさし」の用例群を指している。

- (19) これを思ふに、女程あさましく心の変はるものものはなし。自ら、その時は十三なれば、人も見ゆるして、「よもや、そんな事は」とおもはるるこそをかしけれ。

(好色一代女、巻一)

- (20) 先達てお前さんが。お絹さんといふ琴の師匠と。いふお咄しも有たけれども。よもや室町のお絹さんとは。

(おくみ惣次郎春色江戸紫、三編下)

- (21) 十戒を破ったアルトはやはり苦しんだのに違いなかった。しかしよもや彼のように、……彼は頭を垂れたまま、静かに彼の卓子へ帰って行った。

(芥川龍之介、「或阿呆の一生」)

これらの用例において、述語部分がなくても、「よもや」が打消推量表現と多く共起することから、文脈上における打消の意味を推測することができる。よって、上記の用例では、「そんなことはないだろう」と「室町のお絹さんとは思わなかった」、「彼のようにやる人はいないだろう」という内容が想起されやすい。

以上、「よもや」が含まれる述語完備文と述語完備文ではない「言いさし」の用例を見てきた。しかしながら、今回の調査では、以下のような用例が同時に観察されている。

- (22) このため徳姫と築山殿の仲が悪くなり、さらに信康との仲も不和となった。徳姫の書状により内通を訴えられた信長は、よもやとは思いながらも家康に信康の切腹を命じた。

(九野啓祐『関東郡代の終焉』)

用例(22)は、「よもや」が従属節に出ている平叙文であり、文の意味は「信長は内通するという事態の可能性が低いと考えながら、信康の切腹という命令を出した」になる。「よもやとは思いながら」は「よもや内通することがないだろうとは思いながら」の省略文として認められる。この場合では、文の全体が述語完備文として認められるが、「よもや」と共起している述語部分が実に省略されている。本稿では、用例(22)のような「よもや」が従属節に出現しており、「よもやと思う(もしくは「と思う」の活用形)」の形で出現する用例を「省略」と呼んでおく。本稿は、「よもや」と共起する部分に着目したいので、その用例を独立させており、述語完備文と区別されたい。ほかに、

- (23) 夢見たやうなことどもやな・根引きにするの、請け出すのと・取りじめもない僭上は・十人が十人で思はれたさに言ふこと・床で帯さへ解かぬ身に、よもやと思ひ、頼みますると、偽りしを・先は正直、喜んで、はや談合が極まつたか・さても胸をついたこと、誰にどうと談合せん・勝様からは便宜もなし。

(淀鯉出世滝徳)

(24) 暫くしますと空の大八車が一台ガラ／＼と来てお隣の門口へ轆棒を下ろしますと、中で旦那様と女中の聲がして、やがて大戸をギイとお開きなさいました。よもやと思てゐた妾は、此時ハツとして足が震ふてきました。

(『女学世界』1909年13号、渡辺三代子、大火に遭つた私の経験)

(25) 爾来、京・大坂から江戸を経て会津まで、うち続く戦乱よもやと思っていた嫡男が猪苗代で誕生したのである。容保自身はもちろんのこと、相次ぐ敗戦でうちひしがれていた藩に、光明が差しこむような朗報であった。(井口富夫、『会津と長州と』)

などの用例が観察されている。

ここまで、本節では、「よもや」の用例を述語完備文と「言いさし」、「省略」に大別した。さらに、述語完備文を、「助動詞」と共起する用例及び「終助詞」と共起する用例、「零記号」の用例に分けている。「言いさし」は途中まで言い切らない場合を指しており、「省略」の用例は、「よもや」が従属節に出ており、さらに「よもや」と共起する部分が省略されている用例を指している。「よもや」が打消・打消推量表現と多く共起することで、後者の2つは、述語がなくても、文の意味が推測されやすい特徴がある。

「よもや」と共起する文末形式の変遷を見るため、以上の説明に従い各時代にける「よもや」の用例を表2にまとめた。ただし、「よもや」の連体修飾用法について4.3節で詳しく考察するので、ここでは、出現数だけを提示する。

表2. 「よもや」と共起する文末形式の変遷について

分類		室町時代	江戸時代	明治大正	現代	
述語完備文	助動詞	①	じ	16		
		まい	71(1)	40(1)	23	
		まじ(い)	1	22	2	1
		べからず		1		
		ざるべし			3	
		ないだらう			9	19(6)
		②	ぬ	3		4
		ず	3	2(1)	1	
		ない	8(3)	9(7)	29(18)	
	③	う・だらう・でしょう	1	1		
終助詞	か・ぞ・ばこそ	7	1	2		
零記号		1	3			
言いさし		9	5	9		
省略		17	7	3		
その他				3		
計		1	159	82	94	
連体修飾用法				2	8	
計		1	159	84	102	

「よもや」と共起する文末形式の用例数の内、括弧内の数値は思考動詞¹⁰の数である。

ここでは、表2の調査結果に基づき、「よもや」と共起する文末形式がどのように変遷しているのかを説明する。まず、各時代における打消・打消推量を表す形式(①と②)と共起する「よもや」の用例数及びその時代の全体の用例に占める割合を提示する。打消・打消推量と共起する「よもや」の用例は、室町時代1例(100.0%)、江戸時代124例(78.0%)、明治大正時代65例(77.4%)、現代77例(75.5%)になっている。室町時代の用例を除くと、各時代における①と②の用法は実に大きな変化が見られない。しかし、括弧の中の数字に注目すると、時代を経るごとに、思考動詞の打消・打消推量にあたる用例が増加していることが分かる。つまり、各時代を通じて、「よもや」は相変わらず打消・打消推量形式と最も共起しているが、時代を経るにつれて、思考動詞の比重が大きくなるということである。また、過去の出来事を指す「よもや～と思わなかった」類の表現の増加は次節で述べる「よもや」の意味の変遷にも関係している。

そして、「省略」の用例が江戸時代の17例(10.7%)から現代の3例(2.9%)に減少していることが窺える。なお明治大正時代から、「よもやの連敗」「よもやの失敗」のような「よもや」の連体修飾用法が現れており、2例から現代の8例になった。

以上のことを用いて、小池(2002)の共起パターンに基づき、「よもや」の位置づけを試みる。江戸時代では、「よもや」は「じ」「まじ」「まい」と最も共起している。時代を経るごとに、「じ」「まじ」が「まい」に統合されているため、「じ」「まじ」と共起している「よもや」の用例が少なくなっている。それに対し、「まい」と共起している用例は各時代を通じて残されている。その一方、明治大正時代から、「ない」「だろう」の併用形式が現れ、「よもや」と共起している用例が増え始めている。各時代においても、「よもや」と共起している文末形式の種類がほぼ変わらず、またそれらは全て打消・打消推量を表す文末形式になっている。さらに、時代の変遷につれて、打消・打消推量を表す文末形式と共起している用例の比率がほぼ一致しているため、「よもや」の共起パターンは、小池(2002)の「共立型」(「時代の変遷にかかわらず、複数のモダリティが一定の割合で共起するタイプ」)に属すると言えるのかもしれない¹¹。

¹⁰ 本稿における思考動詞は「思う」だけではなく、思考行為を表す動詞群であり、他に「と考える」「と予想する」「と想像する」などの動詞がある。思考動詞の打消・打消推量形式に注目するので、「と思う」の場合は本動詞の用法を指す。

¹¹ その一方、今回の調査では、「よもや」と同じように、時代を経るごとに、「まさか」は「まさか～と思わなかった」類の表現として多く使われるようになった。この点については、小池(2002)でも言及されている。なお、小池(2002)では「マサカ」が含まれる「言いさし」及び「一語文」が増加しており、「マサカ」は「共起するモダリティが減少していく」の漸減型の副詞とされている。

4.2 「よもや」の意味の変遷

前節では、時代を経るごとに、「よもや」と共起する文末形式の変遷を見てきた。その結果、「よもや」は「共立型」(小池 2002:26)に属すること、「よもや～と思わなかった」類の表現が増加すること、「省略」の用例が減少することが明らかになった。本節では、小池(2002)で定義された「よもや」の意味を用いて、その変遷を明らかにする。

用例(26)では、「太郎は犯人であるかどうか」が不明であるのに対し、用例(27)では、「私は宇宙飛行士になれた」という意味が含意されている。そこで、小池(2002:15)は、事態が成立していないもしくは不明の場合では、「よもや」は「事態成立の可能性の否定」の意味を表すが、当該事態が成立したと含意された場合では、「よもや」は「想定外」の意味を表すとしている。

(26) ヨモヤ太郎が犯人ではないと思う。 (小池 2002 の例 13:17)

(27) 私は、ヨモヤ本当に宇宙飛行士になれるとは思わなかった。 (小池 2002 の例 15:17)

ここでは、「よもや」の使用される文脈を分析し、「(言及される)事態が成立したかどうか」を判断した上で、「想定外」の意味を表す「よもや」の実例があるのかを確定する。

(28) よもやあの老練な人がその道に手ぬかりなどの有らうとは思はれない。

(島崎藤村、「破戒」)

用例(28)は丑松の父の死去を描いており、その原因を説明する文である。丑松の父は病死ではなく、狂った種牛の角に殺されたのである。文脈からによると、父はうっかりとした不手際で自らの死を遂げた。そのため、「手ぬかりがあった」ということが既に発生した事態として認識されている。この場合では、「よもや」は既定の事実に対し、「想定外」の意味を表している。ほかに、

(29) 私が心にもよもや其晩限に逢れなひ様にならふとは(トすこしこゑをうるませて)夢にも思やしません、何だか物が悲しひ様で(ト泪をはら / \ とおとして)

(春告鳥 四編)

(30) 物騒の極子規はとう / \ 骨になった。其骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至って、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかったらう。

(夏目漱石、「京に着ける夕」)

(31) 「パトリック、捕らわれていたあいだ、よもや外に出てこんなご馳走を口にできるなんて想像もできなかつたでしょう」。

(大内侯子・訳、『能楽師になった外交官』)

のような用例もある。用例(29)は過去文ではないが、地の文には「トすこしこゑをうるませ
て」という内容が存在しており、話し手が感情を込めて過去の出来事を語る文として成立
している。用例(30)と用例(31)は過去推量文である。これらの用例において、「その晩は会
えなかった」と「漱石が教師をやめて新聞屋になった」、「捕らわれていたあいだ外に出てご
馳走を口にできた」という内容は既に発生した事実として捉えられる。したがって、いずれ
の用例における「よもや」は全て「想定外」の意味を表している。

以上、「想定外」の意味を表す「よもや」の実例を確認した。以下に、「よもや」の意味
の歴史的な変遷を表3にまとめる。

表3. 「よもや」の意味の変遷について

時代	ジャンル	事態成立の可能性の否定		想定外		計
		地の文	会話文	地の文	会話文	
室町時代	軍記物語		1			1
計			1			
江戸時代	仮名草子	2				159
	狂言台本	8				
	浮世草子(西鶴)	12	18			
	浮世草子		3			
	歌舞伎	21	3			
	歌謡集	1				
	世話浄瑠璃(近松)	13	15			
	浄瑠璃	15	14			
	近世随想集	2				
	洒落本	1	3			
	滑稽本	5	2			
黄表紙		3				
人情本	5	12		1		
計		85	73		1	
明治大正	小説	1	16			84
	小説(明治の文豪)	21	2	4	1	
	小説(大正の文豪)	7	8	5		
	非文芸(社会評論)	14	3	1	1	
計		43	29	10	2	
現代	歴史	6		1	1	102
	国会会議録		7			
	スポーツ・地方新聞	1		7	1	
	哲学・芸術・言語	6	1	5		
	産業・科学	2	1	4		
	文学(時代小説、翻訳小説)	26	15	12	6	
計		41	24	29	8	

表3は時代順に「よもや」が使われているジャンルと文脈(地の文・会話文)、及びその意味をまとめて提示したものである。ここから分かるように、時代を経るごとに、「事態成立の可能性の否定」の意味を表す「よもや」の用例は全体的に減っている。それに反して、「想定外」の意味を表す「よもや」の用例が室町時代0例、江戸時代2例(1.3%)、明治大正時代12例(14.3%)、現代37例(36.3%)のように増加している実態が認められる。その中、会話文の用例が江戸時代1例、明治大正時代2例、現代8例のように増加しているのに対し、地の文の用例は、江戸時代1例、明治大正時代10例、現代29例のように増加している。その数値からみれば、「想定外」の意味を表す用例は地の文に多く出現していることが分かる。

本稿では、「よもや」の意味の変遷は、地の文・会話文のいずれに用いられるかという傾向にも関係していると考えている。そこで、「事態成立の可能性の否定」の意味を表す会話文及び「想定外」の意味を表す地の文を提示することにする。まず、「事態成立の可能性の否定」の意味を表す「よもや」の会話文を挙げる。

- (32) 「娘は?」「娘は一娘は見たことがないから何とも云えないが一まず着倒れか、食い倒れ、もしくは吞んだくれの類だろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町のように行き倒れになるかも知れない」「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。(夏目漱石、「吾輩は猫である」)
- (33) 「ねえ、貴方、よもやお忘れはないでせう。如何なのでございますよ。」勢ひて問詰むれば、極めて事も無げに、「忘れません」(尾崎紅葉、「金色夜叉」)
- (34) 「変わらないのか?」堀は問う。「昨日、トラックから敵艦隊発見の報が届いてからも、同じだ。むしろ、残った方が良い、とも取れるような発言さえしている。よもや、今さら、本土防衛に不安を感じているわけでもあるまい」山本が軽く発すると、即座に堀は口を開いた。「いや。そうなんじゃないのか」「何?」(原田治、『朦朧の覇者』)
- (35) 「遠いところを御苦勞様でした。御無理を申しあげてしまって…」「さぞかし御心配でしょう」「ありがとうございます、ユン長官と会われたそうですね。あの、よもや」
「御懸念には及びません。たいへん友好的な雰囲気でした。ほら、これがその証しです」親父は得意そうに、胸ポケットの葉巻を見せた。
(大沢在昌、『女王陛下のアルバイト探偵』)

用例(32)は、話し手は一つの事態をめぐって、自分がどのように事態を捉えているのかを述べる文になる。事態とされる部分が、「恋い倒れになる」となり、話し手はその事態成立の可能性を否定している。その後、聞き手は話し手の推し量りに対し、万が一事態が起こったら、「それは少しひどい」という意見を述べている。用例(33)と用例(34)、用例(35)は、

話し手がどのように事態を捉えているのかを述べるといふより、相手に対して「発問」する文になる。これらの文では、「よもや」は助動詞と共起するかもしくは「言いさし」として用いられており、「事態成立の可能性の否定」の意味を表している。また、話し手は「よもや」を用いて、事態成立の可能性を強く否定している同時に、ややマイナスニュアンスが読み取れる。いずれにせよ、会話文における「よもや」が用いられる時点で、事実がどうなっているのかが明確されていないことが共通している。

一方の「想定外」の意味を表す「よもや」は、大部分が地の文に出現している。

- (36) まあ、住職と奥様とは互いに仏弟子のことだから、言わば高尚な夫婦喧嘩、と丑松も想像していたので、よもやその雲のわだかまりがお志保の上にあるとは思ってなかったのである。(島崎藤村、「破戒」)
- (37) 虫が知らせるとでもいうのか、これが生涯の別れになろうとは、僕は勿論民子とて、よもやそうは思わなかったろうけれど、此時のつらさ悲しさは、とても他人に話しても信じてくれるものはないと思う位であった。(佐藤左千夫、「野菊の墓」)
- (38) 「父子ともに討ち果たし、鬱憤をはらした。今後の相談もあるゆえ、早々に上洛したい」娘の玉を忠興に嫁がせている光秀としては、よもや細川父子が、この誘いを断るとは思いもしなかったであろう。が、細川父子は光秀の誘いを拒絶、さっそく髪を剃り落とし信長の死を悼んだ。(三宅孝太郎、『戦国茶鬮伝』)
- (39) すると、車で坂道をのぼるにつれ、山の一角がほのかに明るいことに気がつきました「あれは、うちの畑のほうだが…」はじめはそれが、よもやホテルであるとは思いませんでした。車のライトを消して近づいていくと、何千、何万という光が輝いていたのです。(竹田弘、『星をまく人』)

上の用例は「想定外」の意味を表す地の文になる。それらの用例では、現実と相反した内容が先行しており、「夫婦喧嘩しない」と「生涯の別れに悲しさを感じた」、「細川父子が髪を剃り落とした」「ホテルの光が輝いた」という確実に起こったことを引き出したのである。モダリティ副詞「よもや」は「想定外」の意味を表しており、事情を説明しながら、話の展開を追うために用いられている。

以上、本節では、小池(2002)を踏まえて、「想定外」の意味を表す「よもや」を実例によって検証してきた。ここでは、各時代における「よもや」の意味の確認を通して、時代を経るごとに、「想定外」の意味を表す「よもや」が増加していることが明らかになった。前節では、思考動詞の打消形式が増加しており、「よもや～と思わなかった」類の表現が多用されることを提示した。この点と考え合わせると、「よもや～と思わなかった」類の表現が定着していくと共に、「よもや」の意味が「想定外」に傾斜していく様子を指摘することが

できる。また、会話が綴られる文では、「よもや」は言及される事態を否定したり、相手を責めたりしている役割を果たして、「事態成立の可能性の否定」の意味として使われている。それに対し、「想定外」の意味を表す「よもや」は、先行した内容に触れながら、事実とされる内容を引き出すために地の文に多用されている。

4.3 「よもや」が使われる資料の変遷

4.2 節と 4.3 節では、時代を経るごとに、「よもや」と共起する文末形式及び意味の変遷を論じ、思考動詞と共起する用例の増加は「よもや」の意味の変遷に関係していることを提示した。また、地の文で出現している「よもや」は主に「想定外」の意味を表すことにも触れた。本節では、時代を追いながら、「よもや」の使用される資料の種類や性格を考察した上で、「よもや」が、現代の用法になる経緯を明らかにする。なお、本節で扱う資料のジャンルと「よもや」の出現の関係については、前項表 3 にまとめている。

まず、初出とされている室町時代における「よもや」の用例は下記の用例である。

- (40) 「かの祐信は、御身にも一家といひ、よもや幼き者どもにも疎略には候ふまじ。入道も委しく申し含むべく候ふなり。」 (曾我物語、巻第二)

室町時代における「よもや」の用例は 1 例のみであり、文語資料である軍記物語の『曾我物語』から確認されている。この用例は伊東祐親が孫の世話を埒である祐信にお願いしようとする用例である。「祐信が一家の人なので、子供を疎略に扱うという事態成立の可能性が低い」という意味になる。

江戸時代における「よもや」の用例は以下のようなになる。

- (41) 義貞が最期と思し召されよとの・言葉はよもやちがふまじと、申し上げたる口元に・下心ある師直は・小鼻いからし、聞きみたる。(仮名手本忠臣蔵)
- (42) 「夜中に釜は何とも合点はゆかね ども、よもやこればかりを盗んではござるまい」といふ。(西鶴置土産、巻一)
- (43) お六「袷に付た符帳の判、今アノ人が見せさした、コレ此印形と一つなら、よもや知らぬと言われまい。」(お染久松色読販)

用例(41)と用例(42)、用例(43)は、それぞれ浄瑠璃と浮世草子(西鶴)、歌舞伎に出ている用例である。これらの用例において、「よもや」は全て「事態成立の可能性の否定」(小池:2002)の意味になっており、具体的に「その言葉は違いないだろう」と「釜だけを盗むことがないだろう」、「知らないと言わないだろう」の意味になっている。

大木(2019)は、口語が窺える資料として浄瑠璃を挙げている。また、浮世草子は書きことばからなされるが、『国語学研究事典』(1977:739)では、『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』を代表とする西鶴の作品は、「話しことばをそのまま抜き出すこと」ができる口語資料として認めている。前節の表3に示されるように、江戸時代では、浄瑠璃に出ている「よもや」の用例は57例であり、西鶴の浮世草子に出ている「よもや」の用例は30例である。江戸時代では、「よもや」が話しことば的性格が強い資料に用いられる用例は87例以上あると言える。

その一方、表3に基づき、「よもや」が使用される文を見ていく。各ジャンルの会話文に出現している用例は73例観察されており、約半分近く用いられている。そこで、「よもや」が使用される資料の性格と使用される文を併せて考えれば、「よもや」が話しことば的性格が強い資料及び会話文に使用される用例は合計113例に達していることが分かる。そのため、江戸時代では、「よもや」は話しことば寄りであると考えられる。

明治大正時代における「よもや」の用例を見ていく。明治大正時代では、「よもや」の使用は小説と総合雑誌である『国民之友』及び女性を讀者として想定した雑誌である『女学雑誌』のような非文芸のジャンルに転じていき、小説から確認できる「よもや」の用例は65例になり、非文芸ジャンルから確認できる用例は19例になっている。ここでは、小説のジャンルに出ている用例を挙げておく。

(44) ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかにも逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれほどでもなからうと見くびられるかも知れない。

(夏目漱石、「吾輩は猫である」)

(45) お島がいらいらして、そこを立かけようとする、養父はまた言足した。「それで王子の方では、皆さんはどんな考だったか。よもやお前に理があるとは言まいよ。」

(徳田秋声、「あらくれ」)

用例(44)は「よもや」が地の文に用いられる用例であり、このような用例は38例が観察されている。用例(45)は、「よもや」が会話文に用いられる用例であり、このような用例は27例が観察されている。このように、明治大正時代では、「よもや」は地の文と会話文に約1.4対1の割合で出現しており、明治大正時代から、「よもや」が使用される文脈はだんだん地の文に移行していくことが分かる。

(46) 甕島以外の日本人民如何に無氣力なりとは云へ、ヨモヤ武人政治の下に立つことは承諾せざる可し、

(『国民之友』1988年25号、政治上に於る甕島の勢力)

その一方、非文芸ジャンルに出ている「よもや」の用例が 19 例観察されている。用例(46)はその一例になる。非文芸ジャンルに用いられる用例の中、『国民之友』と『女学雑誌』、『太陽』に出現している用例が多い。また、明治大正時代では、漢文訓読体が好まれて使用されることもあり、用例(46)のように、『国民之友』に出現している用例は全て文語の用例であるため、「よもや」はやや硬い表現として認められている。

現代に入ると、「よもや」の使用傾向は大きく三つに分かれている。第一に、用例(47)と用例(48)のように、「よもや」は「まい」のような打消推量表現と共起し、時代小説と歴史に関係する文学作品の中に用いられている傾向である。この場合では、「よもや」が武将のような歴史人物を表象する文脈で用いられている。

- (47) 牛若は打ちふるえつつ、一体どうなることかと五体をすくませていた。「この嘘つき童めが、よもや知らぬとは言わせぬぞエ」男の額を、指先でちよいと突き放して、思わず開いた目の中を、女は悪戯っぽく覗き込もうとする。(邦光史郎、『源九郎義経』)
- (48) 「とは申せ、よもや、会津に加担するわけにはまいりますまい。直江らは義を蹂躪し、国を奪った悪しき者たちですぞ。これに鉄槌下すが、上杉の義でございましょう」
(近衛龍春、『上杉覇龍伝』)

第二に、用例(49)と用例(50)、用例(51)のように、「よもや」は国会会議録に用いられている。国会会議録は会話が文字化された資料であるが、その実質は口頭によるやりとりとして考えられるので、「話しことば」に準ずるものとして扱った。ただし、それらの用例における「よもや」は、敬語と謙譲語が同時に用いられており、そのことが相手に不愉快を感じさせ、慇懃無礼¹²というマイナス効果がある文脈となっている。「よもや」はそれらを強調する言葉であり、この点が「話しことば」として用いられる「よもや」の特徴の一つと考えることができそうである。

- (49) そのため公共事業及び自治体の単独事業を大幅に増加したと強調されたことは、よもやお忘れでないかと存じます。決算は、こうした政府の言い分が全くごまかしであったことを明らかにしているではありませんか。(『国会会議録』第 084 回国会 1978 年)
- (50) 交通容量をオーバーするというようなことはよもやないというふうには当時は考えたわけでございます。(『国会会議録』第 104 回国会 1986 年)

¹² 宇佐美(2017:76)は、ポライトネス効果には、「プラス効果」と「ニュートラル効果」、「マイナス効果」という種類があると述べている。宇佐美(2017:77)によると、慇懃無礼は丁寧すぎる表現であり、過剰行動になるので、失礼と不快を生むことになるということである。

- (51) さらに総理は、昨年この席で大幅減税を公約されたことをよもやお忘れではないと思います。
(『国会会議録』第104回国会1986年)

第三に、用例(52)と用例(53)のように、「よもや」は連体修飾用法として用いられている。連体修飾用法で使われている「よもや」は、「想定外」の意味を表しており、試合と意外な結果が起こった場面に用いられている。この用法は、従来の副詞の用法と異なり、現代日本語では地方新聞と小説に多く出現している。

- (52) 逆に早くも追い込まれたのがラツィオだ。よもやの連敗で現在最下位。戦力補強を施して臨む再開後に復活はあるのだろうか。(用例(2)再掲)
- (53) 師の重位は三十余年前、すでに四十歳であり、その合戦の渦中にいた。よもやの西軍敗戦に、怒り狂った薩摩武士は、示現流の猛威で敵中をかき分け、主君に指一本触れさせることなく西国への退陣を果たしたのである。(多田容子、『双眼』)

さらに、表3から分かるように、現代では、会話文に出ている「よもや」の用例はさらに減少しており、「よもや」は地の文と会話文に約2.2対1の割合で出現している。そのため、「よもや」が地の文に使われる傾向がさらに進んでいると考えられる。

以上、江戸時代から現代にかけて、「よもや」が使われた資料及び文脈を挙げた。ここでは、福島(2008)を用いて、「よもや」の性格がどのように変わるのかを明らかにする。福島(2008)は「口頭言語(話しことば)」と「書記言語(書きことば)」について「言語内情報完結度が高い」か否かによって両者を区別している。対して、「口頭言語(話しことば)」は「日常的な対面的相互行為の一環としての言語コミュニケーションの場において依拠されるような言語変種である」(福島2008:35)とした上で、「書記言語(書きことば)」はほぼ反対の状況から生まれた言語変種であり、「情報の発信者(多くの場合書き手)と受信者(多くの場合読み手)は、同一空間に共存しているわけではない」(福島2008:37)とする。

上記の定義を踏まえると、「口頭言語(話しことば)」はコミュニケーションの場では、受信者の反応及び共有知識が求められることになる。それに対し、「書記言語(書きことば)」は非対面的な場に用いられるので、たくさんの情報及びそれに応じた情報処理が必要とされる。

江戸時代では、「よもや」が会話文に多用されている。また、途中まで言い切らない用例及び共起している部分が省略されている用例が現代より多く観察されている。これらの場合において、省略されている部分があっても、発信者と受信者は意思の疎通ができ、「よもや」は主に「コミュニケーションの場」に用いられていた(もしくは、その実態を写した言語表現に現れている)と考えられる。明治大正時代に入ると、「よもや」が使われている文

は地の文及び非文芸ジャンルに移行していく。それらの文脈は、同一空間にいない「受信者(読み手)」の理解を助けるため、できるだけ多くの情報が補完されるように手がかりとして用いられている。その中で、新聞雑誌に出ている社会評論は「不特定多数の読者」(福島 2008:109)に向けられている。そのため、江戸時代と比べて、明治大正時代の「よもや」は「書きことば」により近づくことになっていると思われる。さらに現代では、文芸ジャンルに用いられる「よもや」の用例は時代小説と歴史に関係する文学作品に出ており、「時代がかった」イメージの文脈で使用される傾向がある一方、「よもや」の連体修飾用法が新聞記事等に出ている。このように、「よもや」はある種特定の言葉遣いになっており、一般的な「話しことば」として認識されにくいものとなっている。また、「よもや」が「話しことば」として成立する国会会議録に用いられても、慇懃無礼の用法を強調する言葉として「マイナス効果」(宇佐美 2017:76)を伴うものであり、使う場面が限られている。

以上、時代の変遷に伴い、「よもや」は「話しことば」から離れて、「書きことば」としての性格を強めていくことが分かる。そして、「話しことば」として使用される際も、用いられる場面が限られていることが明らかになった。

5. 結論

本稿では、共起する文末形式と意味、使用される作品の性格といった観点から、「よもや」の歴史の変遷を見てきた。まず、各時代を通じて、最も共起している文末形式は打消・打消推量形式であり、その割合が安定しているので、「よもや」は「共立型」(小池 2002)に属すと考えられる。しかしその中で、思考動詞の打消形式との共起が増加していき、「よもや～と思わなかった」類の表現が増加しており、固定された表現として多用されるようになったことを指摘した。「よもや～と思わなかった」類の表現は過去の出来事が成立し、話し手の認識から外れるという意味が含意されるため、時代を経るごとに、「よもや」の意味は「想定外」に傾斜していく。なお、「想定外」の意味を表す「よもや」は前述された内容と相反する文脈を引き出すため、「地の文」に多く出現していることが窺える。

そして、江戸時代では、「よもや」が口語性を持つ資料の会話文に多用されたが、明治大正時代では、「よもや」が「会話文」に出現する割合が低くなり、地の文と非文芸ジャンルに多く出現する。現代では、その割合がさらに低くなったことで、「話しことば」寄りであった「よもや」は時代の変遷につれて「書きことば」的な性格を強めていったと判断される。

そのような大きな流れを背景として、現代では、古くからある「よもや」が継続して用いられながらも、対面となる会話に用いられにくくなる。「話しことば」として「よもや」が国会会議録に用いられても、謙譲語または尊敬語と併用し慇懃無礼とされた文脈に出現し、相手に反発する文脈で使われている。そのため、「話しことば」としては、「よもや」

の使用は限られており、全体としてその勢いは弱まっていると言える。その一方、「よもや」は「書きことば」的な性格を強めており、小説の地の文及び非文芸文に用いられるようになった他、時代小説の会話文にも出ている。そこで現れた時代的な人物を表象するための文脈で「よもや」は用いられている。こうした実態を背景として、「やや古風なニュアンスのある表現」(『現代副詞辞典 2002:700)が形成されてきたと考えられる。

さて、今回の調査では、「よもや」「まさか」は同じ人情本に用いられており、両者は一定の関連性が見られることが分かる。また、数量的な観点から、「よもや」が衰退する傾向を示す明治大正時代では、「まさか」の使用が多くなっていた。今後の課題として、「よもや」「まさか」の使用する実態を踏まえて、「よもや」の変遷を遂げる原因と「まさか」との関連性を明らかにしたい。そして、「まさか」「よもや」の以外、「推測」を表すモダリティ副詞は、「おそらく」「さぞ」などの副詞もある。そのため、今回の考察で示していない「おそらく」「さぞ」のような「推測」を表すモダリティ副詞の流れを明らかにしていくと考えている。

調査資料

室町時代：

曾我物語(『新編日本古典文学全集 53』小学館、以下『新全集(巻)』と略述する)

江戸時代：

竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語(『新全集 12』)/好色敗毒散・浮世草子集(『新全集 65』)/好色一代男・好色五人女・好色一代女(『新全集 66』)/日本永代蔵・万の文反古・世間胸算用・西鶴置土産(『新全集 68』)/武道伝来記・武家義理物語・新可笑記(『新全集 69』小学館)淀鯉出世滝徳・冥途の飛脚・丹波与作待夜のこむろぶし(『新全集 74』)山崎与次兵衛寿の門松/仮名手本忠臣蔵・双蝶蝶曲輪日記・妹背山婦女庭訓・碁太平記白石噺(『新全集 77』)/遊子方言・浮世床・春告鳥(『新全集 80』)/『歌舞伎脚本集下』(『日本古典文学大系 54』岩波書店)/『黄表紙 洒落本集』(『日本古典文学大系 59』岩波書店)また、用例検索にあたり、下記のデータベースを利用している。国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(バージョン 2021.03、中納言 2.5.2)を利用。利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「ヨモヤ」をキー検索語にしてデータを収集した(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/index.html> 最終閲覧:2021年6月29日)、国文学研究資料館電子資料館の日本古典文学本文データベース(<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>最終閲覧:2021年6月29日)とジャパンナレッジの全文検索(<https://japanknowledge.com/library/>最終閲覧:2021年6月29日)を利用。

明治大正時代：

国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(バージョン 2021.03、中納言 2.5.2)を利用。利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「ヨモヤ」をキー検索語にしてデータを収集した(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/index.html> 最終閲覧:2021年6月29日)。また、「CD-ROM 版 新潮文庫 明治

の文豪)(新潮社)を「CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪」(新潮社)を利用している。

現代：

用例検索にあたり、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(バージョン 2021.03、中納言 2.4.5)を利用。利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「ヨモヤ」をキー検索語にしてデータを収集した(<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/index.html> 最終閲覧:2021年6月29日)。

辞書類

『国語学研究事典』(1977、明治書院)、『現代副詞用法辞典』(2002、東京堂出版)、『類語大辞典』(2002、東京講談社)

参考文献

- 宇佐美まゆみ(2017)「なぜポライトなつもりがインポライトになるのか:ディスコース・ポライトネス理論の観点から日本語教育に示唆できること」『ヨーロッパ日本語教育』(21): pp.73-81 ヨーロッパ日本語教師会
- 大木一夫(2019)『ガイドブック日本語史調査法』ひつじ書房
- 工藤 浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.161-234 岩波書店
- 小池 康(2002)「現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷」『文芸言語研究 言語篇』(42):pp.13-36 筑波大学文藝・言語学系
- 西原鈴子(1991)「副詞の意味機能」国立国語研究所編『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』:pp.51-80 大蔵省印刷局
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.81-158 岩波書店
- 畠 郁(1991)「副詞論の系譜」国立国語研究所編『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』:pp.1-46 大蔵省印刷局
- 福島直恭(2008)『書記言語としての「日本語」の誕生―その存在を問い直す―』笠間書院
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐって―文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』(11-09):pp.105-116
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.3-77 岩波書店
- 李 知殷(2019)「副詞「まさか」をめぐって」『立教大学日本文学』(121): pp.120-129 立教大学日本文学会
- 山口堯二(2001)「「まい」の通時的変化」『文学部論集』(85): pp.29-42 佛教大学文学部
- 山田孝雄(1922)『日本文法講義』東京寶文館